

まさか本人降臨?

顔見えてる

早く入れて

うわ、子宮口見せるとか

俺のも混ぜろ

# もし小悪魔になれたら

小悪魔の体で触手・スライム・蟲姦排泄物挿入を行う変態TSF作品!!

この作品には  
グロテスクな表現が  
含まれています

23/005:00

女騎士の城



【僕】「ふう…今日も疲れた…」

サービス残業を終えて家路を急いでいる僕は、  
とある会社に勤めるしがないサラリーマンだ。  
そんなある日、いつもの公園沿いの道を通ると、  
公園におかしな落書きがあるのを発見した。

【僕】「…ん？ なんだ」この落書き…？」

近寄って見ると、それは魔法陣のようだ。  
うっすらと発光すらしている。

【僕】「手が込んでるなあ…誰がこんな物を…」

どうやって描いているのだろう。

僕は気になって魔法陣の端に手を触れた。  
その直後、魔法陣から強烈な光が放たれ、  
僕はしばらくの間、目がくらんでしまった。

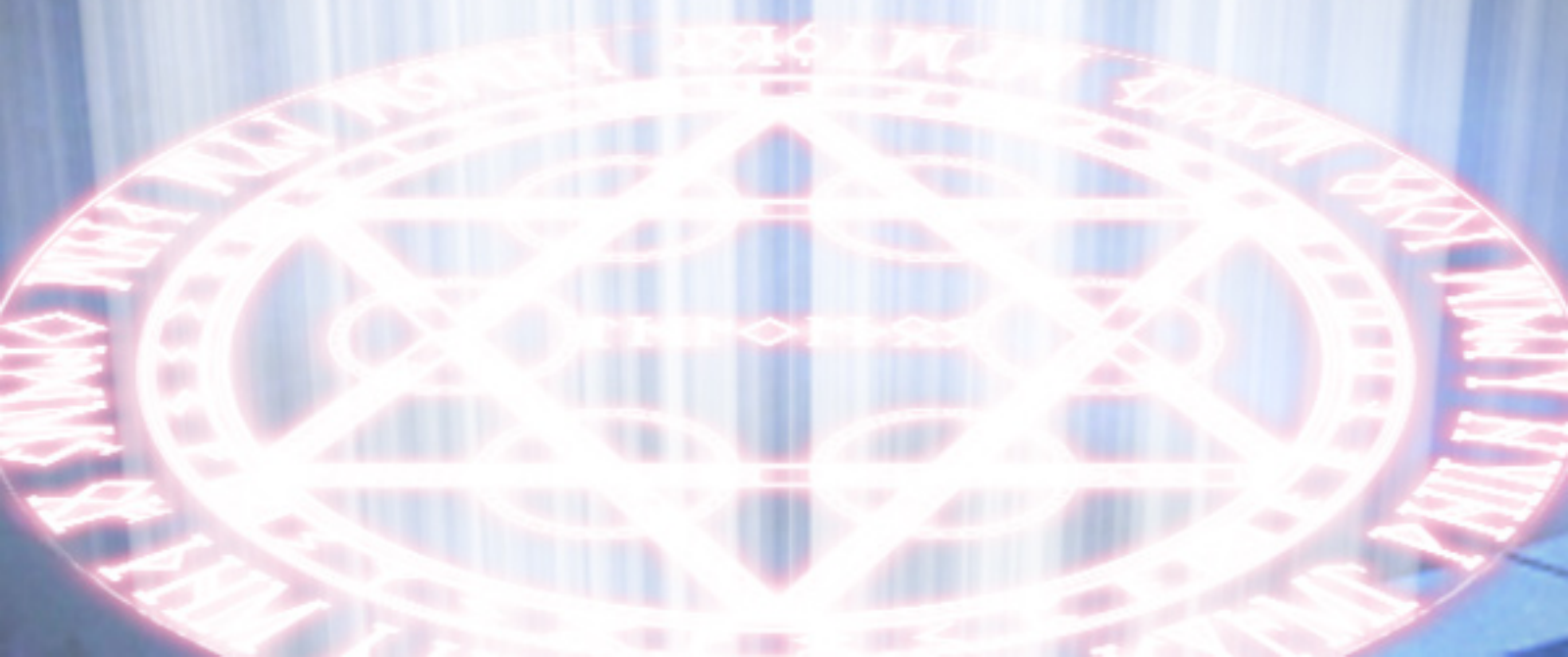
「…？…？」「おや？ 大丈夫ですか？」

【僕】「は、はい…大丈夫です…」

何とか目を開けると、そこには見た事も無い美少女がいた。









【小悪魔】「ふふっ……」契約ありがとっさいます」

【僕】「け、契約……？ 君は一体……？」

【小悪魔】「私は小悪魔、貴方の触れた魔法陣から召喚されました」

【僕】「小悪魔？ 召喚？ ど、どっという事……？」

僕の疑問に対して、小悪魔と名乗る少女が丁寧に説明を始めた。  
どうやら彼女は「この世界で活動するために、男の体が必要らしい。  
それで魔法陣を描いて、それに触れて契約する男を捜していたという事」のようだ。

【小悪魔】「というわけで、一週間ほど体を貸して欲しいのです」

【僕】「か、体を貸せと言われても……」

困惑している僕を横目に、小悪魔は立ち上がって、  
さらに説明を続けた。









【小悪魔】「その代わり、私の体を一週間、貴方にお貸しします」  
【僕】「き、君の体を…？」

そう言われ、僕は小悪魔の体をまじまじと眺めた。  
美少女だけでなく、スタイルも良く、肌もすべすべだ。  
いつの間にかスカートの短くなって、そこから覗く白い太ももがまぶしい。

【小悪魔】「この体、一週間の間、好きに使ってもいいんですよ？」  
【僕】「で、でも…体を貸すなんて…」

困惑する僕を横目に、小悪魔はスカートの両端を摘み上げた。









【小悪魔】「ふふっ…見えますか？ 私のアソコ…毛も生えてなくて綺麗でしょ？」  
【僕】「うおっ…は、はいてないっ…」

初めて見る生の女性の割れ目に、童貞の僕は釘付けになった。  
勃起して前かがみになっていると、小悪魔が近付いて、  
僕の耳たぶをあま噛みしながら囁いた。

【小悪魔】「女の快楽は男の快楽とは比較になりませんよ…？」  
【僕】「うっ…ああっ…！」

もう僕の理性は吹き飛んでいた。  
僕は本能の赴くまま、小悪魔に思い切り抱きついていった。









【小悪魔】「気が付きましたか？」

【僕】「んっ……こは……？」

どうやら僕は、理性が飛んで小悪魔に抱きついた直後、気を失っていたようだ。僕は起き上がって周囲を確認すると、こはどうかやら女の子の部屋のようだ。だが、声はするのに小悪魔の姿はどこにも見えない。



【僕】「あ、あの……小悪魔さん……どこにいらんですか？」

【小悪魔】「ふふっ……貴方の目の前に居ますよ」

目の前と言われ、部屋の窓ガラスを見ると、確かにうつすら小悪魔が映りこんでいる。それを見て、僕は慌てて自分の体を確認した。







【僕】「ほ、本当に体が入れ替わった!?」「こ、これが僕の体…?」  
【小悪魔】「そうですね。なお私は貴方の体からテレパシーで話しかけてます」

部屋にある大きな鏡の向こう側で、スタイルの良い美少女が、自分の意思に併せて、自由自在に体を動かして、表情を変えていく。その肌に触れれば、整った指先と張りの良い頬の感触が伝わってくる。

【僕】「ほ、本当に入れ替わったんだ…!」

【小悪魔】「自分の体なんですから、自由にしてもらっていいんですよ?」

僕は興奮でドキドキしながら、スカートの両端を摘み上げた。









【僕】「こんな綺麗な体が…僕の…」

スカートから覗く割れ目は、無駄毛一本生えておらず、  
ぴっちりとした割れ目に、わずかにピンク色を浮かべていた。  
軽く触れるだけで電気が走るような快楽が脳天に突き抜ける。

【小悪魔】「ふふっ…もっと広げて見てもいいんですよ？」

小悪魔の声が僕の脳内に直接響く。

僕はもっとはっきり見るために、鏡の前で大きく足を広げ、  
割れ目の両端をセロテープで広げて固定した。









【僕】「うーん……女の子の……」

テープで広げたピンク色の性器がはつきり見える。  
クリトリス、尿道、膣口、すべてが鏡に映し出される。  
ピンクの肉ひだは、うっすらと愛液でてかりを帯び、  
僕の呼吸にあわせてひくひくと閉じたり開いたりする。

【小悪魔】「どう？ 綺麗でしょ？」

【僕】「うーん……うん……凄く綺麗……」

【小悪魔】「フッフ……それじゃ、女の子の快楽を教えてあげる……」

小悪魔がそう呟くと、部屋の中心に魔法陣が現れ、回転し始めた。









【僕】「ひっ……」これは……？」

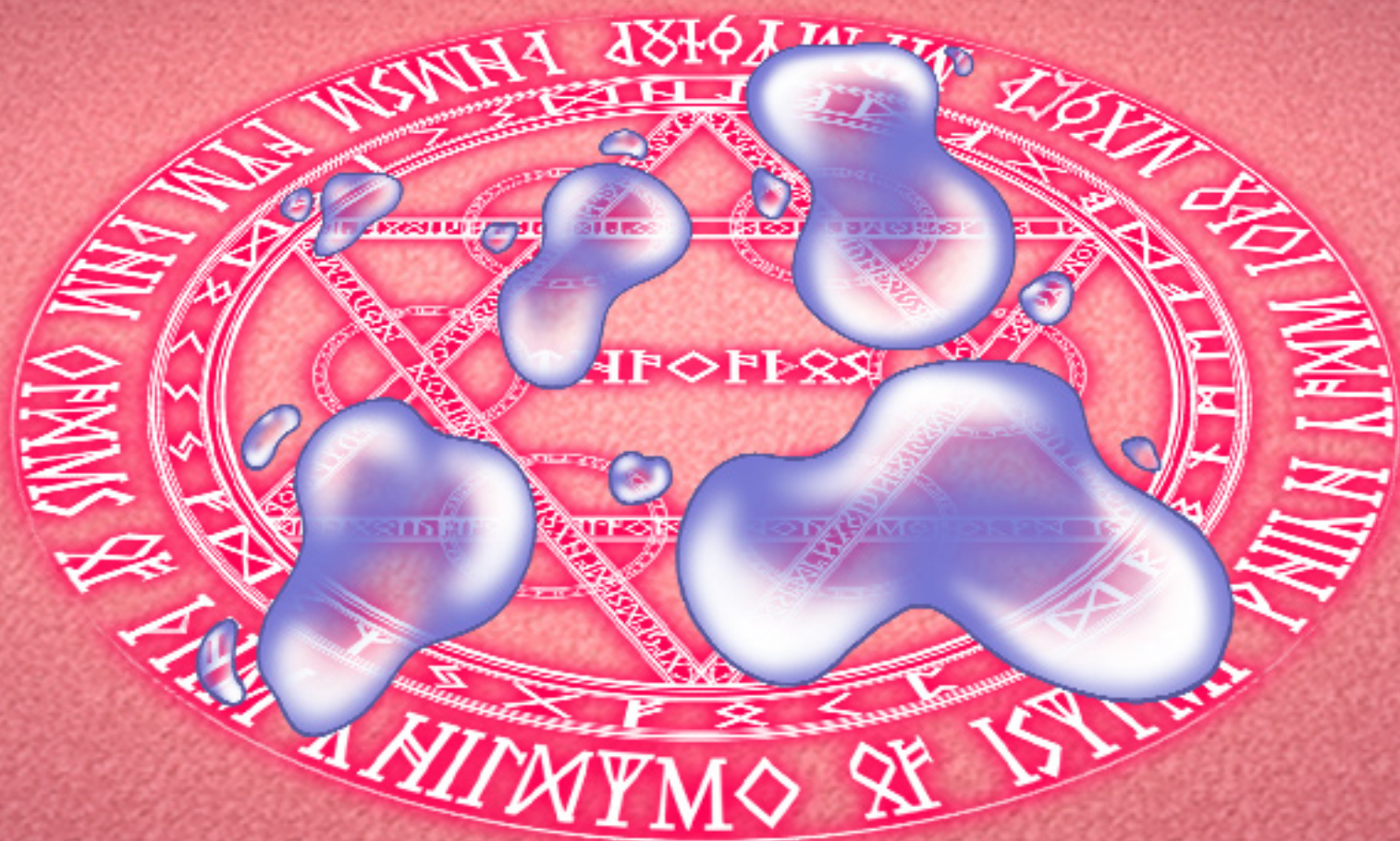
魔法陣から水が染み出すように、  
ゲル上の何かが溢れ出した。  
それはぶるぶると震え、分裂し、  
まるでアメーバのように蠢いた。

【小悪魔】「これはスライムという魔物です。  
ここの世界でも、ゲーム等で  
割と有名な魔物かと思えます」  
【僕】「……これがスライム……？」

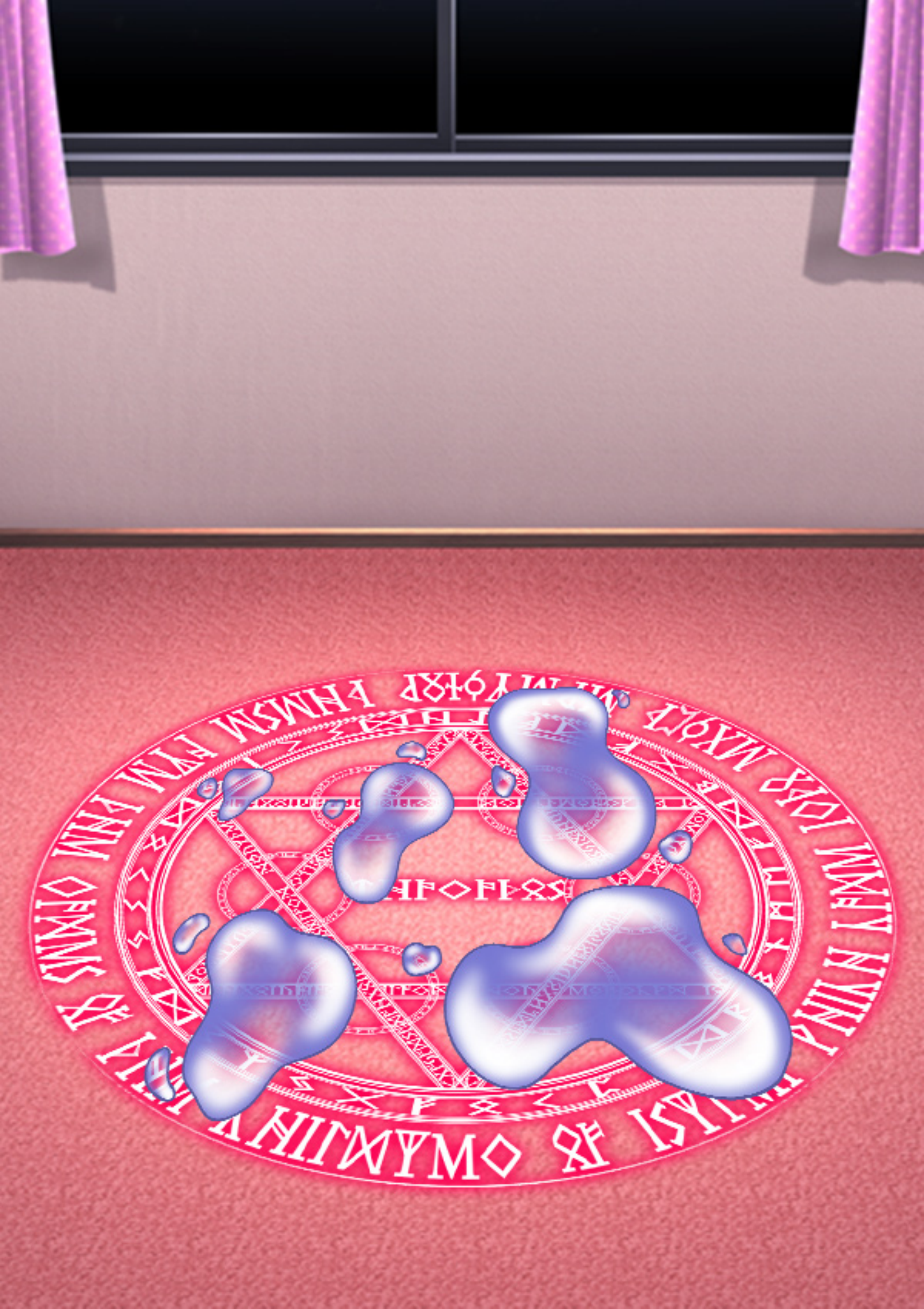
スライムは地べたを這うように、  
僕の体へと近付き、よじ登り、  
体中に絡みつき始めた。

【僕】「ひっ……！」  
【小悪魔】「軟体で自在に変形するので、  
女の子初心者には丁度いい  
相手ですよ……」

小悪魔は僕の狼狽を楽しむように、  
スライムを操り僕を攻め立て始めた。









【僕】「ひっ……! ああああああっ……!」

スライムに絡みつかれ、そのくすぐったい感触に、自分でも信じられないような声が溢れる。スライムが服のスキマから染みこんで、乳首やクリトリスなどの性感帯を愛撫する。

【小悪魔】「ふふっ……気持ちいいでしょ?」

スライムは膣のスキマに形を合わせ、そのままゆっくりと潜り込んで来た。スライムは、僕にこの体の性感帯を教えながら、ゆっくり蠢いた。





